

資料

短期大学看護学科通信制課程（2年制）卒業生の 看護に対する意識について

柳生 敏子¹⁾ 中野 順子¹⁾ 高宮 洋子¹⁾ 長尾 厚子²⁾

Survey on Changes of Attitude of Graduates after Completion of a Two-Year Correspondence Course

Toshiko YAGYU¹⁾, Junko NAKANO¹⁾, Yoko TAKAMIYA¹⁾, and Atsuko NAGAO²⁾

SUMMARY

Objective: The objective of the study is to reveal changes of career attitude on nursing of the graduates 1 year after completion of a two-year correspondence course.

Method: The study based on the questionnaires administered from May to June of 2010, filled out by 574 graduates from the course (year of 2007 to 2009). The questionnaire asked attitude towards nursing and basic profile of the target, containing each item with free space for qualitative analysis. MS Excel was used for the profile and the comments were analyzed by grouping.

Result: The result shows that almost all of the graduates work in hospitals with 200 beds or less as a committee member or a mentor for newly employed nurses. The expectation of the nursing managers for the graduates becomes higher after observing their positive attitude with pride and confidence towards their works. For both graduates and managers, there was a substantial attitude change towards nursing.

Conclusion: The result of the study shows that the graduates take a professional role as a registered nurse with higher expectation of their nursing managers.

1) 短期大学部看護学科通信制課程

2) 保健科学部看護学科

要 旨

研究目的：卒業後1年以上経過した看護師の看護に対する意識を明らかにする。

研究方法：対象は2007年度から2009年度の卒業生574名。2010年5月～6月に質問紙調査を実施した。調査内容は卒業生の背景と看護に対する意識について質問し、全ての項目に自由記述欄を設けた。データ分析方法は、背景はエクセルを使用し単純集計とし、自由記述は質的研究分析の方法を用いて意味内容をグループ化し分析した。

結果：卒業生の多くは200床未満の施設で就業しており、昇格や各種委員会での役割を担い指導的役割を果たしていた。看護に対する意識について、卒業生は根拠に基づいた考えや看護実践の変化が最も多く、知識や思考の深まりによって自信や誇りを持って看護実践に臨んでおり、管理者からもこのことが確認された。

結論：卒業生は看護に対する意識の変化があり、専門職としての意識を向上させ、職場に定着していた。

キーワード：看護基礎教育 短期大学2年課程（通信制）卒業生 看護に対する意識

I. はじめに

1951年にわが国に准看護師制度が導入されて60年余りを経ている。近年、看護基礎教育の大学化が進み¹⁾、看護系大学は200校を超え看護の専門性が求められている。その中で現在でも全国で37万5000人余りの准看護師が就業し、准看護師制度と教育は継続されている。2003年、准看護師経験10年以上の准看護師を対象として看護師養成所2年課程（通信制）制度が創設され、2004年に全国で3校の開設をみた。今回調査の対象の短期大学（以降、同学とする）は、全国で唯一の文部科学省管轄の看護師2年課程通信制の短期大学として2005年4月開設された。

これまでに、全国で15000余名の准看護師が通信制課程を卒業し看護師資格を取得している。同学でも5期5回で1107名の卒業生を輩出した。

先行文献で中島らが、通信制課程で学ぶ学生について「看護教育に初めて導入された通信制による教育であり、働きながらを前提としていることから多様な背景を持つことが学習継続に困難な状況を来す要因」²⁾と述べているように、学生の多くは結婚・出産・子育て・介護など成人の発達課題に向かいつつ、学習の継続には経済的にも学習力の面でも困難

な状況にあることが多い。

卒業直後の学生を対象にした調査で、長尾らは同学卒業生が「准看護師としての10年以上の勤務経験を実践知として活かしながら、理論的体系としての看護学を学び看護の専門性の理解と共に看護観を大きく変化させている。さらに知識や思考の深まりを感じつつ実践内容に変化が起こり、看護職として自信や誇りを持って看護実践に臨んでいること」³⁾と報告している。文献レビューでは、通信制課程を卒業し、看護師資格を取得後就業している看護師を対象にした報告は殆ど見られない。

筆者らは、第42回日本看護学会看護管理（2011）において『看護管理者から見た短期大学における2年課程（通信制）を卒業した看護師への評価と役割期待』⁴⁾と題し、就業している同学卒業生についての看護管理者からの評価を報告した。その調査では、概ね看護管理者の卒業生についての役割期待は大きく、実践能力や責任感も向上しリーダーシップも発揮していることがわかった。

本報では、卒業生の同学で得た看護に対する意識について調査し、同学通信制課程教育の今後の教育活動についての示唆を得たので報告する。

なお本報での用語『看護に対する意識』は、先行文献『長尾厚子、河野益美、金川治美、島内敦子：

短期大学における2年課程（通信制）の教育の意義と課題、神戸常盤短期大学紀要, No29, p.13-23, 2007³⁾を参考に、「看護に対する考え方、根拠のある看護実践、対象の捉え方、患者への関り方、知識や思考の深まり、専門性の維持向上、他職種との連携」と定義し用いた。

II. 研究目的

短期大学看護学科2年課程（通信制）卒業生の就業後の看護に対する意識について調べ、今後の教育活動についての示唆を得る。

III. 研究方法

1. 調査対象

2007年度～2009年度に短期大学看護学科2年課程（通信制）を卒業した574名。

2. 調査時期と方法

郵送による自記式質問紙調査（2010年5月～6月実施）

3. 調査内容

質問紙は対象者の背景に関する9項目と、看護に対する意識についての質問7項目の計16項目で構成した。

対象者の背景に関する質問項目は「年齢」「性別」「就業の有無」「就業施設の種類」「就業施設の病床数」「卒業後の就業施設の移動」「卒業後の役職の変化」「卒業後の給与の変化」「在学中の就業施設の支援」であった。

看護に対する意識については「短期大学で学び看護に対する考え方は変化したか」「短期大学で学び対象の捉え方は変化したか」「短期大学で学び根拠のある看護実践を行えるようになったか」「短期大学で学び患者への関り方や接し方が変化したか」「短期大学で学び自信に繋がったか」「短期大学で学び今後看護の専門性を深めたいと思うようになったか」「短期大学で学び他職種との連携が図れるようになったか」の7項目について、「思う」「思わない」

で回答を求めた。また、質問7項目にはそれぞれ自由記述欄を設置し具体的な内容の記載を求めた。

なお、看護に対する意識に関する7項目の質問は長尾らの先行文献³⁾をもとに筆者ら4名で協議し設定した。

4. 分析方法

対象者の背景は、表計算ソフトExcel.Ver2003を用い単純集計した。

自由記述は、Berelson.Bの手法を参考に段階を踏んで内容協議し、各質問項目にある「(意味のある)文脈」をデータ化（コード抽出）し、その内容を分析し〈サブカテゴリ〉と【カテゴリ】を抽出した。信頼性妥当性は筆者ら4名で協議し担保した。

IV. 倫理的配慮

本調査の目的と方法、目的外使用をしないこと、個人情報とデータ保管の機密性を保持すること、調査協力参加は自由意思であること、調査協力による対象者の不利益は生じないこと、結果は、学会発表、論文投稿で公表することを説明文書に記した。調査への参加協力の同意と承諾は、調査用紙の返送を持って確認した。なお本研究はT学研究倫理審査委員会の承認を得ている。

V. 結 果

1. 質問紙を同学卒業生574名に郵送し、回答の返送があったのは274名（回収率47.7%）であった。有効回答数272名（有効回答率99.3%）であった。

2. 対象者の背景

回答のあった対象者の年齢は30～40歳55名（20.2%）、41～50歳161名（59.2%）、51歳以上56名（20.6%）、性別は、男性11名（4.0%）、女性261名（96.0%）であった。（図1）

「就業率の有無」では、就業している266名（97.8%）、現在就業していない6名（2.2%）で就業率は97.8%であった。

「就業施設の種類」では、病院195（71.6%）、

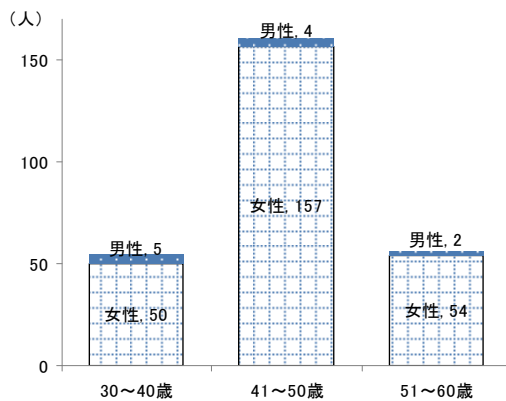


図1 対象者の年齢と性別 (n=272)

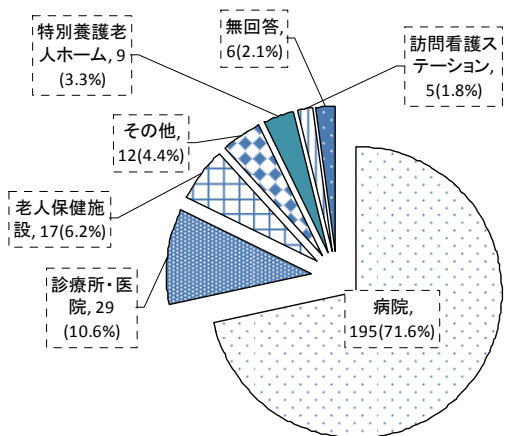


図2 就業施設の種類 (n=272)

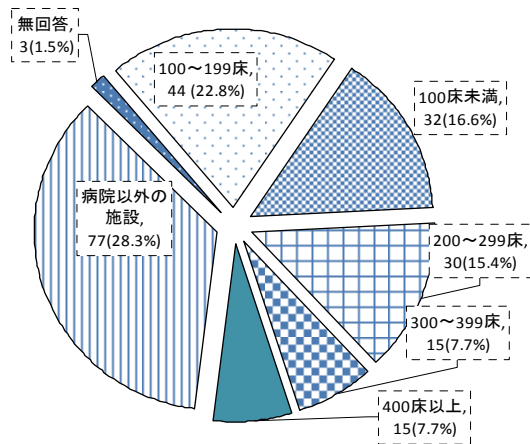


図3 就業施設の病床数 (n=272)

表1 卒業後の就業施設の移動 (n=272)

	人数	%
移動していない (部署移動を含む)	195	71.7%
移動した	74	27.2%
無回答	3	1.1%
転職した	0	0%

100.0%

次いで診療所または医院29 (10.6%)、老人保健施設17 (6.2%)、他に特別養護老人ホーム、訪問看護ステーションの順であった。(図2)

「就業施設の病床数」では、100床未満32 (16.6%)、200床未満44 (22.8%)、200床以上60 (30.8%) で病院以外の施設77 (28.3%) であった。(図3)

「卒業後の施設の移動」では、移動していない者195名 (71.7%)、移動したものの74名 (27.2%) であった。(表1)

「卒業後の役職の変化」では、昇格や、各種委員会の役割を任せられた者は126名 (46.3%) であった。「卒業後の給与の変化」では、昇給があった176名 (64.7%)、減給になった25名 (9.2%)、変化のないものは62名 (22.8%) であった。

「在学中の支援」については複数回答を求めた。支援の内容は、勤務調整208名、奨学金29名、精神的支援68名、支援なし60名、無回答3名であった。

3. 看護に対する意識

看護に対する意識について「思う」が最も多かったのは「短期大学で学び看護に対する考え方は変化したか」の249名 (91.5%)、次に多かったのは「短期大学で学び自信に繋がったか」235名 (86.4%)、続いて「短期大学で学び対象の捉え方は変化したか」223名 (82.0%)、その次が「短期大学で学び他職種との連携が図れるようになったか」221名 (81.3%)、続いて「短期大学で学び根拠のある看護実践を行えるようになったか」219名 (80.5%)、次に「短期大学で学び患者への関り方や接し方が変化したか」211名 (77.6%) の順であり、最も少なかったのは、「短期大学で学び今後看護の専門性を深めたいと思うようになったか」の183名 (67.3%) であった。質問7項目で「思わない」と回答した割合は、32%～7.0%であった。(図4)

「短期大学で学び看護に対する考え方は変化

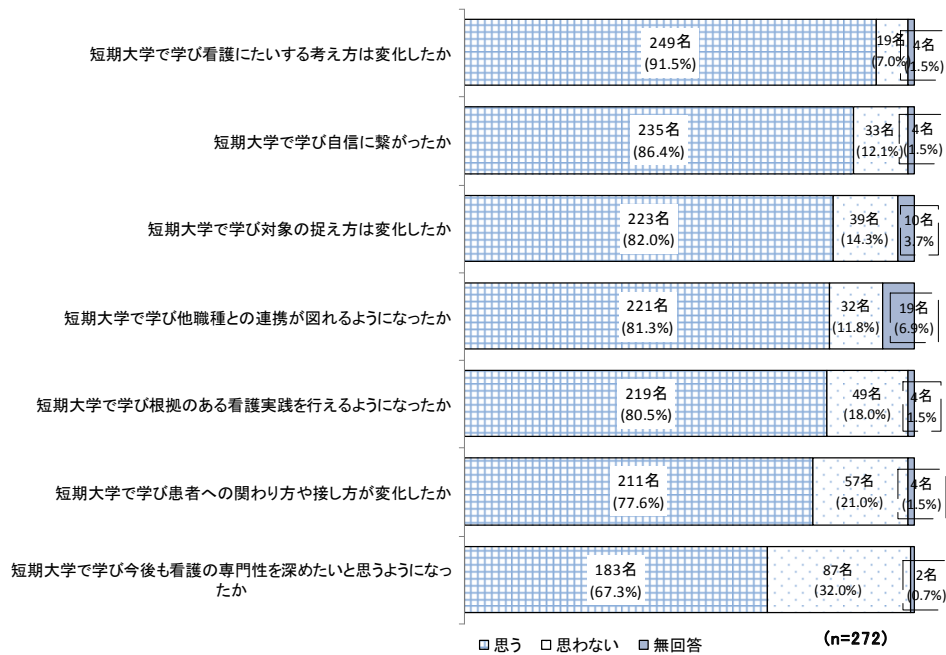


図4 看護に対する意識

表2 看護に対する考え方について（卒業生）（N = 230）

【カテゴリ】	〈サブカテゴリ〉	コード
【根拠のある看護実践】 (77)	〈根拠の意識化〉	・エビデンスを考える ・処置や検査の必要性を考える ・業務の流れの中でも処置に対して考える (46)
	〈根拠に基いた実践〉	・医師に対し援助の根拠を説明する ・疾患についての理解、関連付け ・患者へのアドバイス ・根拠に基いて自分の意思で行動できる (31)
【看護観の変化】 (46)	〈専門職としての自覚〉	・経験に基づく実践でなく看護として捉える ・指示のみでなく考えて行動 ・看護のプロ意識 (34)
	〈看護観の変化〉	・看護観の明確化 ・病気ではなく人を観る ・患者の生きる力を引き出す (12)
【自信と責任】 (41)	〈知識の広がりによる自信ある行動〉	・質問に答えられる ・療養指導の幅の広がり ・病状の理解に確信 (31)
	〈仕事への責任感〉	・状況に対する判断が出来る ・観察力や責任感を持って行える ・専門職という自覚 (10)
【対象の捉え方】 (34)	〈個別性を重視した考え方〉	・患者の全体像を観る ・発達段階、背景、心理を考える ・相手に分かる説明 ・見えない所に思いを寄る (27)
	〈患者・家族を含めたケアの視点〉	・看護の対象の広がり、患者・家族、取り巻く人々 ・患者・家族への心配 (4)
	〈高齢者の見方の変化〉	・高齢者に対する考え方 ・特養における発達段階への関心 (3)
【向上心】 (16)	〈向上心の深まり〉	・自主的にセミナーに参加 ・研究への取り組み ・更なる専門的知識の獲得 (12)
	〈視野の広がり〉	・福祉・専門分野に興味 ・看護動向への視野の広がり (4)

したか」の自由記述欄には223名の記述があり、単文数276から意味のある文脈数（コード）は計230であった。内容分析では、〈根拠の意識化〉〈根拠に基づいた実践〉のサブカテゴリから、【根拠のある看護実践】、〈専門職としての自覚〉〈看護観の変化〉から【看護観の変化】、〈知識の広がりによる自信ある行動〉〈仕事への責任感〉から【自信と責任】、〈個別性を重視した考え方〉〈患者・家族を含めたケアの視点〉〈高齢者の見方の変化〉から【対象の捉え方】、〈向上心の深まりや〉〈視野の広がり〉から【向上心】の11の〈サブカテゴリ〉と5つの【カテゴリ】を抽出した。（表2）

VI. 考 察

看護に対する意識について

藤田は「准看護師教育は、カリキュラム上の時間的制約から、知識が咀嚼されないままに実習にはいること、理解が中途半端なことも多く、“看護とは”の意味を考えることを知らないまま卒業し、准看護師として働き続けてきたことに問題がある」⁵⁾としている。また、法的に准看護師は医師、看護師などの指示のもとで業務を行うことが規定されており、入学前の多くの准看護師は、指示の範囲で業務を行うことが看護と捉えてきたのではないかと考える。このような教育的・法的背景を持った、10年以上の経験を経てきた准看護師を対象とした同学看護師2年課程（通信制）の教育では、根拠に基づいた問題解決思考に重点をおいた学習方法や自己の体験を振り返り再構成して理論的に裏付け、自己の考えを構築するなどの帰納的学習方法を取り入れている。今回の調査で「短期大学で学び看護に対する考え方は変化したか」の質問で91.5%が「思う」と回答しており、他の質問5項目でも「思う」が回答者の75%以上である。また、自由記述の〈サブカテゴリ〉では〈根拠の意識化〉〈根拠に基づいた実践〉〈専門職としての自覚〉〈看護観の変化〉〈知識の広がりによる自信ある行動〉〈仕事への責任感〉〈個別性を

重視した考え方〉の内容が多く見られた。このことは長尾らの卒業直後の調査で報告された看護に対する考え方の変化の内容³⁾と同様であり、卒業後1～3年を経た卒業生においても根拠の意識化や、根拠に基づいた実践、専門職としての自覚、看護観の変化、知識の広がりによる自信ある行動などが維持・継続されていることが確認された。このことから、看護を系統的・理論的に学ぶことで、看護師としての主体的な看護実践の意味が理解され、看護に対する意識の変化に繋がったのではないかと考える。

さらに、「短期大学で学んで自信に繋がったか」「短期大学で学んで対象の捉え方が変化したか」「短期大学で学んで根拠のある看護実践を行えるようになったか」の質問で80%以上「思う」と回答していることにも示されていると考える。

また、仲澤らの看護師2年課程の教育についての報告は「長期の准看護師経験を持つ学生は、看護学校での学びの中で自分を客観視していた。さらに考えることからわかる楽しさを実感し、知的好奇心を刺激している」⁶⁾と述べている。看護師2年課程（通信制）の同学において、10年以上の准看護師経験を持ち、働きながら学び〈根拠の意識化〉〈専門職としての自覚〉〈知識の広がりによる自信ある行動〉〈向上心の深まり〉を実感していることと共通していると考えられる。

対象者の背景に関する質問「就業施設の種類」「就業施設の病床数」「就業施設の移動」についての回答から、卒業生は多くが200床未満の病院、診療所・医院、訪問看護ステーション、老人福祉施設、特別養護老人ホームに就業しており、未就業者は2.2%であった。

准看護師が看護師資格を得たことによって、それまで就業していた施設から他施設への移動をしているものも多いと考えていたが、実際には約7割のものがその職場で就業しており、看護師として責務を果たしていることが伺えた。

また、筆者らの先行調査⁴⁾からも看護師確保が困難な状況で、看護管理者の卒業生に対する役割期待は高く、卒業生が貢献していると評価された。しか

し、今回の7項目の質問の中で、「短期大学で学び今後も看護の専門性を深めたいと思うようになったか」については「思う」67.3%と最も低い結果を示していた。このことは、同学で学び更に向上心をもって専門性を深めようとするときに、卒業生の置かれている条件として、年齢が50歳以上が20%であることや、職場環境が医院・訪問看護ステーションなど人員が限られ多忙であること、家庭的に経済的な負担が増えることなどがあると考えられる。

「短期大学で学び患者との関り方や接し方が変化したか」は「思わない」21%、「短期大学で学び根拠のある看護実践を行えるようになったか」は「思わない」18.0%、「短期大学で学び対象の捉え方は変化したか」は「思わない」14.3%であった。このような「思わない」の結果から、10年以上准看護師として働いてきた個々の学生の背景や、置かれている環境を踏まえて、各看護学において対象の捉え方や、根拠に基づいた問題解決の思考に重点をおいた学習方法やきめ細かい指導が必要であるという示唆を得た。

今回の調査対象はひとつの教育機関の卒業生であり、看護師2年課程（通信制）教育全体を一般化したものではないことが本調査の限界であった。

結 語

今回の調査から看護師2年課程（通信制）の卒業生は、同学で学んだことにより看護に対する意識に変化があり専門職として意識を向上させ職場に定着し、看護管理者の役割期待に応えていることが理解できた。また、多くの同学卒業生は200床未満の病院等地域に密着した施設に就業しており、看護サービスの質の向上に寄与していることが伺えた。

卒業生が「専門職業人として生きていくこと」つまり、看護師としての意識を持ち、それぞれの立場や役割の中での経験が意味あるものとして価値づけられていることは、我々にとっても教育の成果と重要性を再認識することに繋がり、これからの教育実践への示唆を得た。

謝 辞

今回の研究においてご協力いただいた看護管理者と卒業生の皆様に深く感謝申し上げます。研究者一同、皆様からの回答に大きく励まされたことを申し添え、謝辞といたします。

引用文献

- 1) 日本看護協会出版会編：看護関係統計資料，P10，日本看護協会出版会，2011.
- 2) 中島幸恵・佐藤禮子：新たな看護師養成「2年課程通信制」における教育の現況，第39回日本看護学会論文集（看護教育），P289～291，日本看護協会，2008.
- 3) 長尾厚子・河野益美・金川治美他・島内敦子：短期大学における2年課程（通信制）の教育の意義と課題，神戸常盤短期大学紀要，29，P13～31，2007.
- 4) 柳生敏子・中野順子・高宮洋子・長尾厚子：第42回日本看護学会看護管理，看護管理者から見た短期大学における2年課程（通信制）を卒業した看護師への評価と役割期待，P261，2011.
- 5) 藤田京子著：存在感が増すなか，准看護師教育の転換期を迎えて，看護教育52（10），P825，2011.
- 6) 仲澤明美他：長期准看護師就業経験者の看護師学校における学びの様相—学生・卒業生が語る学びが与えてくれたこと—，日本看護学教育学会誌，14，P45，1997.

参考文献

- 1) 舟島なおみ：質的研究への挑戦，医学書院，2007.
- 2) ベレルソン.B著，稲葉三千男，金圭換訳：社会心理学講座Ⅶ大衆とマス・コミュニケーション（3）内容分析，みすず書房，1957.
- 3) 伊藤ゆき・小濱優子・末長真由美：准看護師の職業意識とキャリアアップへのニーズ—准看護師対象のアンケート調査から—，日本看護研

究学会誌32(3), 2009.

- 4) 住田陽子・坂口桃子・森岡郁晴他：看護師のキャリア・アンカー形成における傾向，日本看護研究学会誌33(2), 2010.
- 5) 土澤るり・石川美智子・天野勢子：看護師のキャリア発達の課程に関する一考察 ―卒後2年目と3年目の看護師に焦点を当てて―，日本看護研究学会誌31(3), 2008.
- 6) 林 千冬：2年課程通信制への期待と懸念，看護教育45(4), 2004.